3E2-OS-16-1

社会的インタラクションにおける「見えるもの」としての身体
－エコロジストとしての E. Goffman とインタラクショニストとしての J. J. Gibson－
Observable Bodies in Social Interaction: E.Goffman as Ecologist and J. J. Gibson as Interactionist

高梨　克也[*1,2]
Katsuya Takanashi

[*1] 科学技術振興機構さきがけ
PRESTO, Japan Science and Technology Agency

[*2] 京都大学学術情報メディアセンター
Academic Center for Computing and Media Studies, Kyoto University

Abstract: This article argues that it is indispensable for interaction analyses to regard bodies as observable entities for others co-present. Firstly, observability of bodies is considered with reference to several key concepts proposed by sociologist E. Goffman, which includes focused / unfocused interaction, expression, involvement and co-presence. Then, to explore how bodies become observable, ecological points of view by J. J. Gibson are introduced, which shows the importance of encounter of a body with the environment.

1. 背景：社会的相互行為としてのサッカー

著者らは 2009 年より，サッカーを社会的相互行為と見なし，会話分析やジェスチャー研究などの手法を用いて分析することを試みてきた[高梨 10a][関根 11]. その背景には，従来の一般的なスポーツ分析の観点では，サッカーという現象の本質が適切に捉えられないのではないかという危惧があった.

スポーツを対象とした従来研究のうち，運動学的研究では選手個人の身体的スキルとその向上が焦点となるため，サッカーなどの集団競技は対象となりにくい. 一方，戦術論的研究では，敵・味方の複数選手が関与する状況を全体的な戦術的重要性の観点から分析することに主眼があるが，今度は個々の選手の身体動作のレベルが捨象されやすい. これに対して，極論すれば，サッカーでは，時空間的文脈・制約から切り離して見た個々のプレーは必ずしも最高度の身体運動能力や戦術推論能力の発現であるとはいえないため，運動学的アプローチも戦術論的アプローチもサッカーの分析には適さない. むしろ，サッカーにおいて本質的な点は，ある選手がどのようなプレーをしようとしているのかという志向が身体動作を通じて刻々と表出され，共在する他の選手に観察可能になる，という点にある[高梨 10a].

身体の観察可能性の利用はサッカーのような特定の状況だけでなく，広く対面的相互行為場面一般に共通して見られる特徴であるはずだが，会話のような典型的な対面的相互行為については，従来は「身体の観察可能性」という観点からのアプローチは主流ではなかった. この点について，本稿では，身体の観察可能性についての最も重要な議論を行った社会学者 E. Goffman の概念を用いて考察したい.

2. Goffman の社会的相互行為論

従来のコミュニケーション研究の大半が伝達者の意図を出発点とするコードモデルを前提としていたのに対して[Sperber 86][谷　1997], Goffman は社会的相互行為をより広い視野で捉えていた[Goffman 63].

まず，「焦点の定まった相互行為」は，会話やキャッチボールなどのように，二人以上の参与者が単一の相互的活動と感じられるような単一の認知的・視覚的注意を共同で維持しようとしている状況を指す. 一般的な意味での「コミュニケーション」はこれに対応するといえる. 他方，例えば電車の中で人々がただ同じ時間に同じ場所に共在しているだけの状況においても，互いに相手を一瞥してその人に関する情報を集めると同時に，すぐに視線を逸らし，相手に対して特別の好奇心や意図がないことを示すといった「焦点の定まっていない相互行為」が注意深く行われている.

焦点の定まっていない相互行為をも視野に入れるためには，主体間での出来事を記述するのに伝達意図とは異なる概念が必要になる. Goffman の中でこれに対応するのが「表出 expression」の概念である. ある目的の遂行を意図した行為や伝達には「表出」という側面が付随しており，行為者の意図の有無とは無関係に，他者にとって参照可能なリソースとなる.

> われわれは自己に関する情報を表出的に伝達することもある. この場合には，情報は偶発的に，あるいは何気なく，または意味あり気に伝達され，受け手はそれを拾うという形になる [Goffman 63].

3. 他者の認知の利用

例えば，「ある主体が道路が凍結しているのを見て，滑らないように注意を払う」という場合，この主体は行為の可能性を環境の中に自力で見出している（直接認知）. 次に，「ある主体 B が別の主体 A から『通りのこの辺は滑りやすいよ』という『警告』を受け，滑らないように注意を払う」という場合は，B は A による意図的な言語行為によって自分の行動の仕方を変えており，典型的な「コミュニケーション」であるといえる.

ただし，コミュニケーションと直接認知の相違点を，前者では他者が情報源であるという点に求めるのは誤りである. 「『ある主体 A が道路が凍結しているのを見て，滑らないように注意を払いながら歩いている』のに別の主体 B が気づき，B も滑らないように注意を払う」というケースでは，「（Aが）滑らないように注意を払いながら歩いている」という観察可能な現象に基づいて B が自身の行為を選択するという点は「直接認知」と共通だが，同時に，こうした観察特徴がまさに「他者」による環境認知に基づくものであるという点では「コミュニケーション」とも連続的な現象であるということができる. このように，「主体 B が他の主体 A の観察可能な振る舞いなどから A の認知状態についての情報を獲得することを通じて，環境についての情報を間接的に獲得すること」を「他者の認知の利用」と呼ぶことができる[高梨 10b]. その他にも，「駅のフォームへ駆け上がる人を見て，電車の到着が近いことを知る」場合なども「他者の認知の利用」の例である.

連絡先：高梨克也，takanasi@ar.media.kyoto-u.ac.jp

「他者の認知の利用」が Goffman の「表出」と異なるのは，前者では，観察対象となる他者自身が環境を認知しているという条件が含まれている点である．しかし，ある主体の認知状態が他者にとって観察できるものになるのはそもそもどのようにしてなのであろうか．一つには，この他者は単に環境を「認知」しているだけでなく，環境内における特定の活動に「関与 involvement」しており，その状態が身体的に表出されざるをえないからであると考えられる．関与とは，「ある行為（一人でする仕事，会話，協同作業など）に適切な注意を払ったり，あるいは注意を払うのをさし控えたりすること」である[Goffman 63].

4. 環境と出会う身体

前節では，他者の認知が観察可能になる理由として，この他者が環境内での活動に関与していることを挙げたが，より一般的に，環境を知覚する動物主体はすべて必然的に「動く」ものであるためであると考えることもできる．

Gibson によれば，「環境のアフォーダンスとは，環境が動物に提供するもの，良いものであれ悪いものであれ，用意したり備えたりするものである」[Gibson 79]が，動物がこうした周囲の環境のアフォーダンスを利用するためには，自己と環境との関係を調整しなければならず，そのためには「運動する」ことが必要である．従って，ある活動に関与する主体の認知状態が観察可能になるのは，こうした環境との切り結びが絶え間ない運動として身体的に表出されており，「ある観察者は，他の知覚者を知覚する．さらに観察者は，『他の知覚者がどのようなことを知覚しているのか』知覚する」[Gibson 82]ことができるようになるためであると考えることができる．「他人の行動は私がそうした環境に対して為しうる潜在的な行動を示しており，環境のアフォーダンスへの対処の仕方を教示している」[河野 05].

さらに，社会集団内で生活する動物は，互いに近接しているということを通じて，より広範な動機づけ形成の経験を持つことができる．特に，ヒトの場合，文化と技術によって，環境のアフォーダンスやこれに関する情報を探索する努力を集団化してきたため，このようにして形成された文化的人工物に囲まれた群棲環境 populated environment[Reed 96]は，他者の認知の利用の可能性を本来的に高めるものであったと捉えることもできる．

Goffman が対象としていた状況は人々の「共在 co-presence」であった．共在とは，「各自が行っていることが相手に知覚されるほどに，また知覚されているという感覚が知覚されるほどに近接している」状況を指すが[Goffman 63]，生態学的にいえば，これは群棲環境以外の何物でもない．

5. 共在の生態学へ

本稿で述べてきたことは主に次の 2 点である．

- インタラクション研究の立場からは，身体を「他者にとって観察可能なもの」と見なす視点が不可欠である．
- 身体の観察可能性という視点からは，インタラクション研究においても，主体と環境との相互作用を捨象することはできないということが帰結する．

サッカーにおける相互行為をすべて送り手から受け手への意図的な伝達によるものと見なすことはできない．少なくとも，ある選手が敵チームの選手に対して何かを意図的に伝達しているという記述は明らかに不適切である．従って，サッカー分析には，他者の認知の利用という観点や，これを可能にする身体の観察可能性のレベルでの行為連鎖記述が必要になる．そして，おそらく会話の場にあっても，焦点の定まっていない相互行為や他者の認知の利用としての次元がなくなるわけでない．

従来のコミュニケーション研究では，焦点のあるインタラクションばかりが扱われてきたが，参与者が多人数になり，環境が複雑になるほど，焦点の定まった相互行為だけを対象とするのでは不十分であることが明らかになる[高梨 09]．例えば，会話参与者が会話内のある出来事を契機として個人的な活動に付随的に関与するようになることや[高梨 11b]，逆に，オフィスや家庭などの共在環境において，ある行為者の個人的行為に他者が注意を向けたことが契機となって会話が開始されることも多い．さらには，共在環境内に 2 つ以上の焦点の定まった相互行為があり，そのグループ間で新たな会話などが開始される場合もある[高梨 11c]．従って，会話を真空で行われているものとしてではなく，日常的な情報環境に埋め込まれた活動として営まれているものと見なし，会話がその周囲の環境と時空間的にどのように接続しているかを把握していくことが必要になる[高梨 11a].

謝辞

先行研究の共著者の皆様に感謝いたします．本研究は JST 戦略的創造研究推進事業さきがけ「多人数インタラクション理解のための会話分析手法の開発」の一環として行われた．

参考文献

[Gibson 79] Gibson, J. J.: The Ecological Approach to Visual Perception, Houghton Mifflin Company, 1979.（生態学的視覚論：ヒトの知覚世界を探る，古崎敬・古崎愛子・辻敬一郎・村瀬晃（訳），サイエンス社，1985）

[Gibson 82] Gibson, J. J.: Reasons for Realism: Selected Essays of James J. Gibson, Reed, E. & Jones, R. (eds.), Lawrence Erlbaum Associates, Inc., 1982.（直接知覚論の根拠，境敦史・河野哲也（訳），勁草書房，2004）

[Goffman 63] Goffman, E.: Behavior in Public Places: Notes on the Social Organization of Gatherings, Free Press, 1963.（集まりの構造－新しい日常行動論を求めて，丸木恵祐・本名信行（訳），誠信書房，1980）

[河野 05] 河野哲也：環境に拡がる心－生態学的哲学の展望，勁草書房，2005.

[Reed 96] Reed, E. S.: Encountering the World: Toward an Ecological Psychology, Oxford University Press, 1996.（アフォーダンスの心理学－生態心理学への道，細田直哉（訳），新曜社，2000）

[関根 11] 関根和生・高梨克也：サッカーにおける守備側選手が攻撃側選手との時間的と空間的ズレを埋めるための手がかり，日本認知科学会第 28 回大会発表論文集，601-608，2011.

[Sperber 86] Sperber, D. & Wilson, D.: Relevance: Communication and Cognition, Blackwell, 1986.（関連性理論－伝達と認知，内田聖二（他訳），研究社出版，1993）

[高梨 09] 高梨克也：参与構造，多人数インタラクションの分析手法，坊農真弓・高梨克也（編著），オーム社，156-171，2009.

[高梨 10a] 高梨克也・関根和生：サッカーにおける身体の観察可能性の調整と利用の微視的分析，認知科学，17(1)，236-240，2010.

[高梨 10b] 高梨克也：インタラクションにおける偶有性と接続，インタラクションの境界と接続，木村大治・中村美知夫・高梨克也（編著），昭和堂，39-68，2010.

[高梨 11a] 高梨克也：実社会で自然に生起する継続的なミーティング活動のフィールド調査の狙いと工夫，人工知能学会資料 SIG-SLUD-B101，55-62，2011.

[高梨 11b] 高梨克也・平本毅：ミーティングの周辺的参加者が何かに気づくとき，電子情報通信学会技術報告 HCS2011-41，77-82，2011.

[高梨 11c] 高梨克也：複数の焦点のある相互行為場面における活動の割り込みの分析，社会言語科学，14(1)，48-60，2011.

[谷 97] 谷泰（編）：コミュニケーションの自然誌，新曜社，1997.